

7. 当センターの3年間における高気圧酸素治療の状況と問題点について

山下一好*¹⁾ 畑谷重人*¹⁾ 稲垣英昭*¹⁾
 栗原真由美*¹⁾ 丹木義和*¹⁾ 杉原英司*¹⁾
 鈴木紀江*¹⁾ 梅田忠良*¹⁾ 久野木忠*¹⁾
 杉 正俊*²⁾ 吉松成博*²⁾ 池田一美*²⁾

〔*¹⁾東京医科大学八王子医療センター臨床工学部〕
 〔*²⁾同 麻酔科〕

【目的】当センターの3年間における高気圧酸素(HBO)治療の状況と問題点について検討した。

【対象・方法】当センターに、セクリスト社製第一種装置・モデル2500Bが導入された1991年4月から1994年3月までの3年間にHBO治療を施行した162症例(総治療回数961回)に対し、各年代毎の症例内訳等と、①装置の操作性・トラブル②管理・運営③チェックリスト表の3項目に対しての問題点及び件数を検討した。

【結果】各年代毎の症例数と内訳(上位3番目まで)は、初年度は52症例、脳梗塞等32.7%、腸閉塞23.1%、低酸素性脳症15.4%、2年目は55症例、脳梗塞等34.5%、突発性難聴20.0%、腸閉塞14.5%、3年目は55症例、突発性難聴29.0%、腸閉塞20.0%、脳梗塞等12.7%であった。①は操作者である臨床工学技士(CE)9名全員が操作性及び患者監視に優れていると認めたと、カプセル内の温度調節や輸液時におけるチューブ交換を問題点として挙げた。トラブルはマイクの不調等が14件あった。②はHBO経過用紙の煩雑性、治療時間スケジュール等に問題が生じた。スタッフの勉強会は5回行なった。③はチェックリスト表におけるチェックもれ件数は、各年代毎に52件22.3%、78件21.7%、89件24.2%であり、内訳は胃管、点滴ラインのロック、危険物等と治療を中止しなければならない事項を多く含んでいた。

【考察】HBO治療を安全に施行するためには、スタッフの教育及び十分なチェックが必要不可欠であり、今まで施行してきた中での問題点を究明、分析し改善策を考え施行する必要があると思われた。

8. 第1種治療装置における10年間の治療報告

近藤敏哉*¹⁾ 高倉照彦*¹⁾ 鈴木茂樹*¹⁾
 渡邊直哉*¹⁾ 江口恒良*²⁾

〔*¹⁾亀田総合病院 ME 室〕
 〔*²⁾同 脳神経外科〕

当院の高気圧酸素治療の歴史は昭和59年9月に第一種治療装置を設置したのが始まりで、高気圧酸素治療装置は脳神経外科の指導管理下にて治療を行った。今回10年経過を機会に治療概要をまとめたので報告する。

高気圧酸素治療装置は羽生田鉄工製KS-202-0特型で空気加圧方式である。標準治療時間は加圧10分、2ATA維持時間45分、減圧15分で行っている。全治療患者総数は584名(男341名 女243名)で、患者年齢は新生児から95歳で平均年齢60.1歳であった。年齢層では66~70歳代をピークに高齢者が占めていた。延べ治療回数は4998回、患者の治療回数は1回から70回まで平均8.5回であった。また治療時間をみると10分(治療中止)から最長120分で平均治療時間は47分であった。治療加圧は1.5ATAから3.0ATAの間で平均2.1ATAで行われた。また治療を診療科別でみると脳神経外科患者が76%で大半を占め、つづいて外科の6.5%、整形外科3.6%、耳鼻科2.7%の順で、最も少ないのが婦人科2名であった。

当院での第1種高気圧酸素治療装置による治療は24時間体制で脳神経外科をはじめとする各科治療に有効利用されてきた。第1種治療装置のため患者に若干制限があるが10年間1件の事故なく行えた。